

高齢社会を生きるのはむずかしい

人間総合科学大学 人間科学部 教授 丸井 英二

ときおり考える。私たちはひとりでマラソンを走っているのだろうか、それとも皆で駅伝を走っているのだろうか、と。

性別に年齢構成をあらわす人口ピラミッドは、今は壺型だが、その昔、本当にエジプトのピラミッドの形をしていた。そんな頃には、数少ない高齢者は知恵者で、希少な資源で尊敬されていた。最近はやりの「ソーシャル・キャピタル」のひとつのリソースだったわけである。いまや希少資源ではなく過剰資源、ひょっとすると余剰資源かもしれない。

仲間が増えると本人たちは楽しいのかもしれないが、碌なことはない。徒党を組みはじめ、ひとりでは恥ずかしくて出来ないことを始めるようになる。これは恥ずかしい。

希少価値であれば、存在していることに価値がある。ひとり淡々と走り続けるマラソンランナーの姿は美しい。しかし、大きすぎる先頭集団はあとからくる選手の邪魔になるだけ。だからといって自分だけ先頭集団から抜け出すこともできない。

どうしたらいいのだろうか。ひとりでいることを大事にして楽しむか、タスキを渡すことだろう。駅伝のすがすがしさはどこから来るのだろうか。米国などはリレー

でもバトンタッチがうまくいかずオリンピックでも失格になるほど、自分だけを大切にすること。いつまでも自分が走ることでなくて、タスキを渡して次の選手の走りに期待すること、それが先行ランナーの役割である。日本はバトンタッチの素晴らしさに定評があったはずである。

たまたま、結果として長生きすることもある。それは仕方がない。気がついたら長生きしていた。そういう人生はいい。しかし、自分だけの長生きを目的として生きるなんてつまらない。もちろん、わが身を振り返ると、やはり健康に、できれば長く生きたいと思ったりもする。この年になっても、新しい発見や新しい出会いがあって、やはり面白いことも多い。でも、早めに次のランナーを見つけて手渡して、拍手してやることを忘れては、次の時代は来ない。

声を出すことはたしかに必要なだが、高齢者がいつまでも大声を上げるとうるさい、邪魔になる、いなければいいのにと思われる。良寛さんの「災難に逢う時節には災難に逢うがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。これはこれ災難をのがるる妙法にて候」という言葉を思い出す。高齢社会をきれいに生き抜けるのは、なかなかむずかしい。

◇ PROFILE 丸井 英二 (まるい・えいじ)

東京大学医学部保健学科卒業。大学院修了後、東京大学医学部疫学教室助手、医学部国際交流室講師、東京大学留学生センター教授を経て、国立国際医療センター研究所部長、順天堂大学医学部公衆衛生学教授等を歴任。2012年より人間総合科学大学人間科学部教授。ダイヤ高齢社会研究財団評議員。専門は疫学、国際保健学、健康と医学の歴史など。